

南房総における竹林の増減とその要因

荒木 志子

近年、各地で竹林の拡大が観察されている。これについて、主に生態学の分野から拡大の現状把握や原因が検討されているが、竹林拡大の原因を明らかにするためには、生態学的な側面からの考察に加え、社会背景・人間活動の変化も含め考察を行う必要がある。本研究は、南房総における竹林の面積変化を明らかにし、その原因をタケの生態的性質と人間活動の変化から考察することを目的とし、千葉県館山市畑地区を例にとり、調査を行った。本研究で扱う竹林は主にメダケ (*Pleioblastus Simonii* Nakai) 林である。

畑地区を含む南房総はメダケ林が多く、古くより良質なメダケ材を産出し、房州団扇などメダケを使った工芸品も地場産業として発達してきた。良質なメダケ材は山から伐り出され、6年ごとに皆伐される。これら竹産業は燃料革命や石油化学の発達などの影響を受け、戦後徐々に衰退した。畑地区の住民は従来稲作と共にヤマを開墾して畑作を営むかわら、農閑期にメダケを山から伐る「きりこ」やそれを運ぶ「だし」となり、竹産業と関わってきた。また、それと並ぶ副業として木炭生産も盛んであった。この木炭生産は、1960年代から1970年代にかけて生産量が激減した。また、山間耕地は戦後徐々に使われなくなり、谷部にある耕地も減反政策を受け、1980年代以降減少した。

上記のような社会経済的背景のもとで、竹林にどのような変化があったかを知るため、1963年、1974年、1995年の空中写真を判読して竹林(メダケ林・モウソウチク林)の分布図を作成し、プランメーターを用い面積の増減を調べた。さらに、増減前後の土地利用形態を空中写真判読により調べた。また、適宜聞き取り調査、現地踏査などを行った。

1963年、1974年、1995年におけるメダケ林総面積は、それぞれ17.8ha、41.7ha、37.8haであった。1963年から1974年の間(以降1963→1974)に総面積では23.9ha増加しているが、実際には1963年にメダケ林であったが1974年にメダケ林でなくなった箇所(以降メダケ林縮小地)も7.2haある。つまり、同期間に新たにメダケ林となった箇所(以降メダケ林拡大地)は31.1haである。このように、1963→1974にメダケ林は急激に増加した。分布図及びメダケ林パッチの面積頻度分布により、この急激な増加は、比較的大きなパッチの出現によるものとわかった。メダケ林となる以前の土地利用形態は、広葉樹林・針葉樹林(72%)、伐採跡地(24%)、耕地(4%)であった。なお、広葉樹林と針葉樹林を一緒に示したが、その殆どは広葉樹林である。

同様に、1974年から1995年の間(以降1974→1995)におけるメダケ林縮小地の総面積は26.8ha、メダケ林拡大地の総面積は22.9haであった。これは、大きなパッチの少数消失と、小さなパッチの多数出現による寄与が大きかった。メダケ林となる以前は広葉樹林・針葉樹林が61%あり、次いで耕地が18%、伐採跡地13%、牧場造成地8%であった。

メダケ林の増減プロセスを考察するため、縮小・拡大前後の土地利用形態を①牧場造成地②広葉樹林(常緑広葉樹萌芽林)③針葉樹林(スギ植林地)④耕地の4つに整理し、各土地利用形態とメダケ林の関係、及びその土地利用形態に対する人間活動からメダケ林増減のプロセスを以下のように考察した。

①牧場造成地は、1970年に牧草地として造成されたものの、使用されなかった箇所がある。その箇所に、地下茎によって旺盛に繁殖するメダケが侵入した。

②メダケは成熟した広葉樹林には侵入できないと考えられる。しかし、伐採直後にはメダケが侵入し、一時的に林冠を構成する。その後、広葉樹の萌芽が徐々に成長しメダケの稈高を越えると、広葉樹が林冠構成種となる。一方、住民は、従来、広葉樹林内に侵入したメダケを、木炭を焼く際の敷き木やはさのあしなど自家消費用として伐採していた。このため、従来、広葉樹は速やかに復活できた。

③スギ植林地では、下刈りが行われる植林後10数年はメダケが侵入できない。その後も侵入は少量である。近年は下刈りがされないため、メダケが若いスギ林に入ることもある。

④タケの地下茎は肥培地を好むため、耕地にはメダケが侵入しやすい。よって、耕地にメダケが侵入するか否かは、住民の対策如何による。従来は、ヤマの畑が不要になると炭材のマテバシイ、用材のスギが植林され、結果としてメダケの侵入を抑制していた。とりわけ、マテバシイは成長が速く林冠が閉鎖しているので、メダケの侵入を防ぐ力が強いと思われる。近年における谷の耕地の縮小に対しては、放置しているところも多く、こうした放棄耕地にメダケの侵入も見られる。だが、住民は放棄耕地が荒れることを基本的には良しとしていない。そのため、世間体や習慣から植林をしたり、そこまで出来ない場合にも暫定的な処理を行ってタケの侵入を防ごうとしている。しかし、高齢化などの問題により達成されず、タケが侵入している箇所が多いという現状がある。

次に、以上のことをふまえて、先に述べたメダケ林の面積変化を社会的背景もふまえ、

総合的に考察したい。

まず、1963→1974には、メダケ林面積の急増があった。これは、竹材産業の衰退に伴うメダケ林の皆伐の減少が、メダケが周辺へ進出する誘因となっている。メダケは、その性質から裸地に近い状態の場所を好んで増殖するが、この間の侵入地は、木炭生産のために伐採された広葉樹の伐採跡地であり、また成長途中の広葉樹林であった。従来、伐採跡地や広葉樹に侵入したメダケは、主に農家の自家消費用に使われてきたが、おりしも木炭生産の衰退期であり、敷き木としての利用や手入れが減少してきたために、メダケは伐られずに侵入した広葉樹林内で生育を続けられた。これが、大きなメダケ林パッチの出現によるメダケ林面積の急激な増加として現れた。

1974→1995には木炭生産が殆どされなくなり、広葉樹は伐採されることなく成長し、一時メダケに奪われていた林冠を奪い返した。これが、大きなパッチの消失として現れた。一方、減反政策や、集約的なセンリョウの栽培が盛んになってきたことから、80年代以降耕地面積が減少した。また、住民の高齢化により、植林などの対応がしきれず、耕地が放置された。そのため、放棄耕地にメダケが侵入し、小さなメダケ林パッチが多数出現した。

以上のように、メダケ林は、短期間に増減をくりかえしながら拡大していた。その要因は、単に竹産業の盛衰だけではなく、木炭生産の衰退や減反による耕地の減少といった社会的背景に応じた、人間の生活の変化に求められた。その上で、他の植物との生態学的な競争関係によって竹林の動的な変化が決定されていた。